琉球大学学術リポジトリ

琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語:
	出版者: 高良倉吉
	公開日: 2009-03-03
	キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美
	キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands
	作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008

琉球・薩摩交流史の痕跡

―トカラ列島の北西部海域をめぐる調査報告―

深　澤　秋　人

一、調査の概要と意義

筆者は2001年度から2003年度にかけて、トカラ列島やその周辺の島嶼（いずれも鹿児島県域）に関連する調査を7回にわたって実施した。主な調査地と時期は以下の通りである。

2001年度：　中之島を中心とした合同調査（2001年8月）
　　奄美大島・鹿児島調査（2002年2月）
2002年度：　口永良部島・屋久島調査（2002年11月）
　　黒島・硫黄島調査（2003年3月）
2003年度：　鹿児島での中之島文書調査（2003年8月）
　　鹿児島での中之島文書調査（2003年9月）
　　甑島・阿久根調査（2004年1月）

それぞれの調査では、史料調査を行うとともに、那覇と鹿児島を結ぶ近世期の海上ルートでも、北側を中心とする琉球船や大和船の寄港地や港湾施設、海上ルートを包み込む北側の海域における琉球船や大和船の漂着地などを踏査した。

近世期の琉球の王権・国家は明清両朝と薩摩藩、さらには徳川政権とのあいだに通交関係を成立させていた。この結果、那覇・福州・鹿児島を結ぶ海域では、海上交通によってヒト・モノ・情報が行き交ったが、このなかに琉球と薩摩を結ぶ海上ルートは位置付けられ、そのなかにトカラ列島は含まれる。また、この海域の北側は、長崎に来航する中国商船の海上ルートの周縁部でもあった。

那覇と鹿児島を結ぶ海上ルートは沖縄諸島・奄美諸島・トカラ列島・大隅諸島の島嶼部と内海である錦江湾にまたがっていた。たとえば、鹿児島県立図書館が所蔵する「南島海路略図」には、錦江湾から沖縄諸島にとどまらず、宮古諸島、八重山諸島にいたる航路が線で書き込まれ、航路自体はもちろんのこと、航路を示す線が集中する交通量が多かった島嶼部や内海の港の位置を確認することができる。さらには、琉球の王権・国家と薩摩藩の通交のほかにも、島嶼間や北側の薩摩半島、大隅半島とのあいだには地域間交流が多元的に存在した。

したがって、トカラ列島に限定せず、那覇と鹿児島を結ぶ海上ルートの一部を包み込む

北側の海域の海上交通の様相を考察することは、近世期のトカラ列島像を再構築するための必要な作業と考える。このようなミクロな視点をいくつか設定することは、那覇と鹿児島を結ぶ海上ルートのみならず、那覇・福州・鹿児島を結ぶ海域の全体の状況を考えて行くうえで有効性を持つのではないだろうか。

踏査した寄港地、漂着地、港湾施設は以下の通りである。その範囲は、南は奄美大島の宇検から北は出水脇本（現阿久根市）におよぶ海域である。

①奄美大島：大熊、名瀬（現名瀬市）、宇検（現宇検村）、大和浜（現大和村）、津代（現笠利町）

②中之島（現十島村）

③屋久島：宮之浦、一湊（現上屋久町）

④口永良部島（現上屋久町）

⑤硫黄島（現三島村）

⑥黒島（現三島村）

⑦薩摩半島：山川（現山川町）、枕崎（現枕崎市）、坊津、泊浦、久志浦（現坊津町）、串木野（現串木野市）

⑧鹿児島：前之浜、稲荷川河口部、甲突川河口部（現鹿児島市）

⑧川内川河口：久見崎、京泊（現川内市）

⑨上甑島：里（現里村）、中甑、浦内湾（現上甑村）

⑩中甑島：平良（現上甑村）

⑪阿久根（もとは出水）；脇本（現阿久根市）

本稿では、これらのなかでも、トカラ列島の北西部海域に位置する口永良部島、黒島、硫黄島、上甑島を踏査した成果と関連史料を紹介してみたい。踏査するなかで気づいた、それぞれの島や海上など海域の景観についても触れてみたい。これらの島は、いずれも17世紀以降、薩摩藩の直轄領であった島である。なかでも口永良部島は那覇と鹿児島を結ぶ幹線ルート上に位置し、黒島と硫黄島は幹線ルートの周辺に位置する。これに対して、上甑島は那覇と鹿児島を結ぶ直接の海上ルートからは外れた位置にある。

なお、本稿では、それぞれの島の地理的な位置付けをめぐる記述については、『角川日本地名大辞典46鹿児島県』（角川書店、1983年）、『日本歴史地名大系第四七巻　鹿児島県の地名』（平凡社、1998年）を参考にした。

二、「密貿易所タリシ熊毛郡上屋久村口之永良部島全図」について

口永良部島は屋久島の北西 12 kmの海上に位置する。島の南側の集落である本村の正面には対岸との距離が約1kmにもおよぶ広大な湾入が東西に広がり、那覇と鹿児島を結ぶ海上ルートにおける重要な寄港地のひとつであった。近世期には屋久島奉行の管轄であり、

鹿児島から在番人が派遣されていた。また、口永良部島には、琉球の王権・国家が清朝に派遣した船舶が復路に漂着している。嘉慶 9（1804）年の接貢船、咸豊 11（1861）年の進貢二号船、同治 2（1863）年の進貢二号船の三件である（注 1）。

ところで、口永良部島の 19 世紀後半の状況に関連する資料として「密貿易所タリシ熊毛郡上屋久村口之永良部島全図」（鹿児島県立図書館蔵、請求記号 K29823 カ、以下「口之永良部島全図」）と題された絵図が存在する。口永良部島を踏査する前日の 2002 年 11 月 16 日、鹿児島県立図書館においてこの絵図の調査を行った。絵図全体や絵図に記された文字情報の一部については、すでに徳永和喜氏によって紹介されている（注 2）。

（一）「口之永良部島全図」とは

この絵図は、大正年間に実施されたと思われる口之永良部島の調査の成果をもとに作成されたものである。作成者は川上久良なる人物で、大正 8（1919）年 9 月 15 日付けで作成されている。法量は縦 28.7 ㎝、横 102.3 ㎝である。料紙には、右から口永良部島の図、「本村略図」「熊毛郡上屋久村字永田ノ北端土面橋ヨリ遠望シタル口之永良部島」の 3 つの図が横並びに描かれている。川上久良は大正 8 年 9 月 15 日以前に実際に口永良部島に滞在し、島の古老や老婆、さらには元藩庁貿易帆船の船員に対して聞き取り調査を実施している。その内容には 19 世紀後半の口永良部島の状況が反映されていたと思われ、口永良部島では密貿易が行われていたという（注 3）。3 つの図の周辺や図中には聞き取り調査の成果や地名が記されている。

（二）「口之永良部島全図」の文字情報

①「口之永良部島全図」右側（口永良部島の図）

大正年間の調査当時のものと思われる口永良部島の図には、道路のほかにも山が書き込まれ、島の西側よりも東側に多くの山が連なっていることがわかる。図中に記されている地名などは以下の通りである。本村、新村、キダカメ岬、岩屋泊、赤岬、般若嶽又番屋岳、追岬、西ノ湯温泉、古城趾、田代、寝待温泉、通詞ヶ岳、湯向温泉、七釜、新岳、噴火口、古岳、向江浜（時計とは反対まわり）である。ほかにも、島の南東にあたる七釜付近から南東方面の海上に向かって矢印が伸び、「上屋久村字永田ハ此方角に当ル」と記されている。また、古城趾については、「古城趾中ニ城主日高成次郎ノ墳墓アリ」という注記もある。

さらには、本村の範囲と思われる部分が点線で囲まれているが、本村と記された箇所から道路を挟んだ部分、本村の南西端にあたる箇所が赤く四角に彩色されている。そこからは点線が伸び、「此ノ所現今御番所ノ趾ト称ジ、大正八年ヨリ凡五十五年前後密貿易ヲ為シタル英国人ノ居住セシ洋館ノ在リシ所ナリ」と記されている。「大正八年ヨリ凡五十五年前」は 1864 年（元治元、同治 3）である。

なお、図の左下には調査当時のものと思われる人口が以下のように記されている。

本村戸数	百二十五戸	男三二五人	女三四五人
向江浜	七十一戸	男二〇〇人	女二〇七人
新村	十九戸	男六二人	女五七人
岩屋泊	十二戸	男七五人	女六七人
湯向	十二戸	男四五人	女三九人
田代	六戸	男一五人	女一四人
西湯	一戸	男二	女一

凡戸数全部二四五戸　人口男女合計一四五四人

②「口之永良部島全図」中央（「本村略図」）

口永良部島の図と同様に、大正年間の調査当時のものと思われる「本村略図」には、西から東へ6つの小地名（岩崎、上村、下村、鎌倉、横井手、町浜）が記され、屋敷地、道路、河川、橋、水田、区役所、金岳神社、金岳小学校が書き込まれている。それによると、本村では3本の河川が海に注ぎ、河川には合計4つの橋が架かり、海岸付近に2ヶ所、下村の東側（鎌倉の南側）、横井手の合計4ヶ所には田があったことがわかる。

本村の西側にあたる岩崎には14の屋敷地が書き込まれている。そのうちの7つにまたがる部分が赤く彩色され、「洋館ノ在リシ所」と注記されている。

なお、「本村略図」右上部分には、次のような聞き取り調査の成果が記されている（句読点は筆者）。

本島ヨリ南方海上ニ中之島ト云ヘルアリ。密貿易当時藩庁帆船貿易用トシテ多額ノ金額銅銭ヲ載積シ居リシニ、暴風ニ遭ヒテ中之島沿岸ニ沈没セシコトアリ。先年東郷某等潜水夫ヲ傭ヒ来リテ捜索シタルニ、常ニ浪荒クシテ僅カニ判金・二朱銀・孔方銭ノ数枚ヲ得タルノミニシテ中止セリト云フ。

一、永良部ノ密貿易所ヲ一ニ白糖方ト称シ、一時ハ白糖ヲ製シタルコトアリシ由同島古老ヨリ聞キシコトアリ。

③「口之永良部島全図」左側（「熊毛郡上屋久村字永田ノ北端土面橋ヨリ遠望シタルロ之永良部島」）

この部分の上部には調査の成果がもっとも多く記されている。前文と5つの箇条書きは、19世紀後半の口永良部島の状況が反映された興味深い内容である。また、4つの箇条書きからなる附記は大正年間の口永良部島の様子を伝えるものである。下部には「熊毛郡上屋久村字永田ノ北端土面橋ヨリ遠望シタルロ之永良部島」が描かれている。幾重にも山が連なる山頂付近からは、黄色に彩色された噴煙が立ち上っている。川上久良は、口永良部島に滞在した前後の時期に、屋久島の北西部に位置する永田にも実際に足を運んでいたものと思われる。上部の文字情報は以下の通りである（句読点、注記は筆者）。

口永良部本村ニ於テ大正八年ヨリ凡五十五年前後ニ藩庁ト英国人トノ間ニ密貿易

ヲ為セシコトアリシヲ曽テ耳ニセシコト□□ガ予□ニ同島ニ在ルコト□□□ヶ年ナリシヲ以テ□□及同島向江浜ニ住ス□□□□□□村ノ鈴四郎助□藩庁貿易帆船ノ船員ナルモノヨリ僅カニ聴取セル事実ヲ茲ニ記載シテ聊カ参考ニ資セントス。

一、藩庁ニテハ帆船ヲシテ日本海ヲ経テ北海道ニ航セシメ、昆布其他ノ海産物ヲ移入シ来リ、更ニ鹿児島ヨリ米穀醤油ノ如キモノヲ満載シテ、口永良部ニ於テ茲ニ仮住セル英人ト交易シタリト云フ。

一、其当時彼等ノ使用セル何物カ在ルナラント種々捜索セシモ何物ヲモ獲ル所ナカリキ。

一、之ヨリ先キ加賀金沢ニ於テ銭屋五兵衛ナル者密貿易ヲ営ミシガ事露顕ニ及ビテ遂ニ牢死スルニ至リシガ、此事早クモ我藩庁ニ聞ヘ、同島ノ密貿易所タル英国人居住ノ洋館ハ唯一日ニシテ取壊タレ、用材ノ如キハ何処ニカ木片スラ残サズ悉ク持チ去ラレント云フ。斯ル有様ナレバ貿易ノ趾ヲ湮滅センガ為メニ、或ハ何物ヲモ止メザランコトニ努メ、器具其他当時ヲ偲ブベキ物品ヲモ総テ棄却セシナラント云フ。

一、当時英人ノ主任トモ云フベキ者ハ同島ノ婦ヲ入レテ妾トセシト云フ。今猶一人ハ生存シ居レリ。

一、英人ノ飲料トシテ携帯セシモノハ、老婆等ノ談話ニ徴シテ麦酒・葡萄酒・ブランデーノ如キモノナリシガ如キ。

附記

一、産物トシテ見ルベキハ新岳ヨリ産出スル□□（硫黄カ）、凡一ヶ年百五十万斤、此価十六万円。黒砂糖凡ソ一万円。女竹凡ソ一万円。

一、牛馬数ハ凡ソ五百頭位ナラン。

一、新岳麓ニ無数ノ鹿棲息ス。

一、温泉三ヶ所湧出シ、湯向ノ如キハ夏期屋久島本島及ビ種子島等ヨリ無数ノ浴客アリ。

大正八年九月十五日　川上久良記

①から③にわたって記されている聞き取り調査の成果のなかでも、19世紀後半の口永良部島をめぐる状況として、特に注目すべきと思われる箇所にそれぞれ触れておきたい。

①に見える「御番所ノ址」の「御番所」とは鹿児島から派遣された在番人が詰めていた施設であろうか。そうであるとすれば、そこに近接して、密貿易を行っていた英国人の居住する洋館が存在していたことになる。また、大正8（1919）年の55年前とは、1864年（元治元、同治3）である。前述したように、大正8年の「五十五年前後」にあたる咸豊11（1861）年と同治2（1863）年には琉球の帰唐船が口永良部島に漂着している。イギリス東洋艦隊が錦江湾に侵入した薩英戦争がおこったのは1863年である。

②については、1860年代前半と思われる「密貿易当時」、貿易を目的とした多量の貨幣を積んだ「藩庁帆船」がトカラ列島の中之島沿岸で沈没したとある。「藩庁帆船」はどこ

へ向かっていたのであろうか、岩崎にあったとされる洋館の英国人が行っていた密貿易との関係はどうなるのであろうか。また、「密貿易所」は一時期「白糖方」とも称されたとある。「密貿易所」とは「御番所」に近接していた洋館と一致するのであろうか。白砂糖を精製（藩営か）していた時期と密貿易が行われた時期の関係は前後するのであろうか、重複するのであろうか。白砂糖自体が密貿易と直接関係するのであろうか。

③の前文では、川上久良は調査をするにあたって、口永良部島に数年間滞在したことが知られる。また、聞き取り調査をした元藩庁貿易帆船の船員は向江浜に居住していたことがわかる。

箇条書きの部分によると、洋館の英国人が消費する食糧（米、醤油など）は鹿児島からもたらされ、交易されていたようである。また、「之ヨリ先キ（一八六四年以前）」に加賀国金沢で銭屋五兵衛が密貿易を展開していたことが発覚し、牢死したという情報を薩摩藩が入手すると、「密貿易所」である洋館は1日にして解体され、証拠湮滅を計ったという。北陸における密貿易と口永良部島のそれはリンクしていたことになる。また、英国人の洋館は薩摩藩の命令系統のもとで解体されたことになる。さらには、「英人ノ主任」は口永良部島の女性を「妾」とし、そのうちの1名は大正年間の段階で生存していたとある。ほかにも、老婆からの聞き取りによると、洋館の英人はビール・ブドウ酒・ブランデーなどを持ち込んでいたとのことである。

（三）口永良部島踏査について

口永良部島調査は2002年11月17日から11月18日にかけて行った。11月17日、屋久島の宮之浦に向かうフェリー屋久島2に乗船し、8時45分頃に鹿児島港の北埠頭を出発した。錦江湾を通過し、竹島や硫黄島を右手に見ながら12時30分頃に屋久島の北側に位置する宮之浦に到着した。海上では竹島や硫黄島を確認することができたものの、屋久島には雲がかかっており、宮之浦岳の山頂を望むことはできなかった。宮之浦からはすでに停泊しているフェリー太陽（上屋久町営）に乗船し、13時頃に宮之浦を出発、14時40分頃に口永良部島に到着した。フェリーの発着場は島の南側に位置する本村にある。当日は本村の民宿に宿泊した。「本村略図」では下村の東側（鎌倉の南側）に田と書き込まれていた場所にあたる。

2日間にわたって「本村略図」に見いだせる岩崎、上村、下村、鎌倉、横井手、町浜を歩いてみた。屋敷地、道路、河川の流路などは大正年間の面影を残しているように感じた。特に道路については、海岸線に新しい道路が敷かれているものの、一本奥へ入ると「本村略図」の道をたどることができた。河川は暗渠となった部分があり、橋も付け替えられてはいるものの確認することができた。水は比較的豊かなようであるが、辻ごとに簡易タンクが設置されていた。海岸付近の田は、海岸線に沿って数百メートルにわたって造営された護岸壁やその内側に敷設された道路によって姿を消していたが、横井手付近には現在でも水田が存在した。なお、海岸線に沿って護岸壁はめぐっているが、埋め立てはなされず、

護岸壁の外側には数百メートルにわたる砂浜が残存していた。区役所が置かれていたあたりには、上屋久町立へき地出張診療所が設置されていた。英国人が密貿易をしていたという洋館や白砂糖を精製していた白糖方が置かれていたとされる岩崎も歩いてみた。川上久良がそうであったように何らかの痕跡を見つけることはできなかった。しかし、「本村略図」段階の道路や屋敷地の区画は残っているように思えた。

本村の東側の丘の上には金岳神社が鎮座していた。拝殿は南側の海を向いており、海側から拝殿につづく階段からは、本村の集落はもちろん、広大な湾入を一望することができた。なお、階段の下には船上からも遠望することができた鳥居が置かれていた。奉納者は、東京都中央区に本社のある医薬品の製造会社恵命堂の社長である柴昌範氏であった。鳥居の正面右側の柱には、「昭和三十六（一九六一）年五月恵命堂口永良部島乾燥工場を建築、昭和三十九（一九六四）年十二月鳥居を奉納」と銘記されていた（注 4）。金岳神社のある丘の中腹に置かれていた金岳小学校は移設され、九州電力口永良部発電所の敷地となっていた。金岳小学校と金岳中学校は横井手付近の平地に移設されていた。

なお、初日の夕方に路地を歩いていると、夕暮れのなか、家々からは薪を燃やす白い煙が立ち上り、その光景と薪が燃えるにおいが印象的であった。復路はふたたびフェリー太陽に乗船し、18 日の午前 10 時 30 分頃口永良部島を出発したが、往路に比べて海上は時化ていた。屋久島の北側に位置し、琉球・薩摩のあいだを往還する船舶の寄港地であった一湊を海上から撮影したが、甲板では何かににつかまっていなければ立っていられないほどであった。12 時 10 分頃宮之浦に到着した。フェリー太陽はこのあと種子島の鳥間に向けて出発していった。

（四）鹿児島県立図書館所蔵の川上久良関連史料

鹿児島県立図書館には、「口之永良部島全図」のほかにも川上久良に関わる 3 件の史料が所蔵されている。これらについて、2004 年 1 月 18 日に鹿児島県立図書館で史料調査を行った。3 件の史料は 1880 年代後半、1900 年代前半、1910 年代中頃に川上久良によって筆写、編集されたものである。「口之永良部島全図」は 1919 年に作成されており、鹿児島県立図書館が所蔵する川上久良の関連史料のなかでは一番新しいものということになる。川上久良の履歴の詳細については不明なところが多いが、少なくとも 1880 年代後半から 1910 年代後半にわたって活動していたことを確認することができた。

①「下荒田郷中青年規約書」（請求記号 K37 シ）

12 ヶ条からなる史料であるが、末尾に「嘉永五年子十月　下荒田郷中」「明治廿一年二月四日　二階堂新五郎宅ニ於□□写之　川上久良」と見える。作成されたのは嘉永 5(1852) であるが、川上久良によって明治 21（1888）年に筆写されたことがわかる。料紙には大正 9（1920）年 8 月 29 日付けの鹿児島県立図書館の印とともに、川上久良が寄贈したことを示す印も捺されている。「口之永良部島全図」を作成した翌年の 1920 年に川上久良

によって寄贈されたことになる。川上久良の 1920 年までの活動を追えることにもなる。

②「朝風舎　福崎季連大人歌集」（請求記号 K911 フ 09）

この史料によって、川上久良は琉球とも間接的な関係があることがわかった。1870 年代前半に最後の在番奉行（のち外務省九等出仕、内務省九等出仕）をつとめた歌人でもある福崎季連の和歌を、明治 33（1900）年に川上久良が編集したものである。93 丁からなり、所々訂正されている。川上久良は福崎季連と親交があったものと思われる。端書には「明治三十三年六月　江南堂の主　川上久良謹識」とある。川上久良は江南堂と号していたようである。末尾には「明治三十三年八月」と見え、この段階で編集は終了したようであるが、以降にも断続的に編集されていた可能性がある。57 丁目には「明治三十六（一九〇三）年十月　江南堂主人」とも見える。版心に「鹿児島職業紹介所」とあり、「季連　三十五（一九〇二）年十月」と記された福崎季連の原稿（福崎季連の自筆ではなく川上久良の筆写か）も挿入されている。1900 年以降も収録する和歌の原稿のやりとりをしていたのものであろうか。92 丁目には昭和 3（1928）年 5 月 5 日購入とある鹿児島県立図書館の印が捺されている。

兼清正徳「歌人福崎季連」（『芸林』38-2、1989 年）に収録された「福崎季連年譜」によれば、福崎季連は明治 9（1876）年に琉球藩から鹿児島県に戻っている。翌年の明治 10（1877）年には霧島神宮（現霧島町）の宮司となり、退職する明治 31（1898）年までつとめている。明治 33 年に大和神社（現天理市）の宮司、翌年の明治 34（1901）年には白峯神社（現京都市）の宮司となり、明治 41（1908）年に退職、明治 43（1910）年に死亡している。「朝風舎　福崎季連大人歌集」が編集された 1900 年には、福崎季連は鹿児島県に居住していなかった可能性が高い。前述した「季連　三十五年十月」と記された原稿は、前年から白峯神社の宮司をつとめていた福崎季連が京都から送付したものであろうか。福崎季連の門人である樋脇盛苗によって編集された『朝風舎歌集』が刊行されたのは、白峯神社を退職した翌年、死亡する前年の明治 42（1909）年である。「朝風舎　福崎季連大人歌集」はその 9 年前、恐らくは鹿児島で川上久良によって編集されたことになる。

③「薩藩ト真宗トノ関係参考書類」（請求記号 K18 カ）

『東本願寺独立史』など 12 件に及ぶ文献から参考となる箇所を抄出したものである。21 丁からなり、20 丁目には「大正五（一九一六）年一月二日浄写　川上久良」と見える。末尾には大正 5 年 12 月 26 日購入とある鹿児島県立図書館の印が捺されているが、大正 5 年を大正 4（1915）年に訂正している。川上久良はこの史料を作成したあとに口之永良部の調査を行ったのであろうか。

三、島嶼部の琉球人墓

琉球と薩摩のあいだでは、琉球船・大和船によって多くのヒトが往還した。琉球からは、上国使者のほかにも僧侶や水主などが島嶼部を経由して鹿児島に向かった。しかしながら、島嶼部や鹿児島、あるいは活動していた土地などで客死した琉球人も少なからず存在する。鹿児島には琉球人の菩提寺である光明寺（伽藍は現鹿児島市長田町の南風病院付近）が存在した。また、南林寺（伽藍は現鹿児島市松原町の松原神社）に埋葬された琉球人も存在したようである（注5）。

これまでに、鹿児島県内に現存する琉球人の墓については、いくつかの存在が確認され、一部については紹介されている。竜興山大慈寺（現鹿児島県曽於郡志布志町志布志2丁目）の境内には、17世紀末期（1699年）と18世紀末期（1798）の2基が存在する。いずれも琉球人の僧侶の墓である（注6）。また、柏尾山道隆寺跡（現鹿児島県肝属郡高山町新富）には、19世紀初期（1804年）の1基が存在する。これも琉球人の僧侶の墓である（注7）。さらには、鹿児島市吉野町の雀ヶ宮の墓地には、新垣筑兵衛の墓が存在する。もともとは南林寺にあったものが移されたようである（注8）。

さらには、海雲山正龍寺跡（現山川町福元）にも、18世紀後半（1786年）の墓が1基存在する。これについては、2001年8月27日に合同調査の一部として実施した山川調査において正龍寺墓地を訪れ、実見することができた。山川石の墓石が多く立ち並ぶ墓地の最奥部の右から3番目に位置していた。法量は高さ53㎝、幅26.5㎝、奥行き21㎝であった。銘文は以下の通りである。

右側面「本琉球那覇東村良氏嫡子」「大城仁屋」

正面「大清乾隆五十一年丙午」「日本天明六年」「鉄叟□□□□門」「二月十五日□」

左側面「琉球国」「那覇東村大城仁屋」

鹿児島の光明寺ではなく、山川の正龍寺に埋葬されたということは、鹿児島に向かう往路の船中、あるいは山川滞在中、那覇へ向かう復路での山川滞在中に死亡したものであろうか。

ほかにも、玉龍山福昌寺跡（現鹿児島市池之上町）には「琉球僧侶之墓」「旧琉球藩人之墓」の2基が存在する。筆者が1997年の3月に確認したところによると、いずれの墓碑にも、大正10（1921）年7月15日に南林寺から福昌寺跡に移されたことが記されている。しかし、それ以前の明治41（1908）年9月13日に旧光明寺から南林寺に移葬されたとあり、詳細については、浄土宗不断光院（現在は鹿児島市易居町に所在）の位牌堂に安置してある位牌に見えるとも記されている。1908年段階で旧光明寺から南林寺に移葬されたのは、「琉球僧侶之墓」では21名、「旧琉球藩人之墓」では93名と銘記されている。旧光明寺の墓は個人ごとの墓だったと思われ、南林寺に移葬された段階で現存する墓石が製作され、それが1921年に福昌寺跡に移されたのであろうか。

ところで、これまでに存在が確認されている琉球人の墓は鹿児島市内、薩摩半島、大隅

半島に分布していることに気づく。島嶼部のものについては存在自体が知られていないものもある。そこで、かつて島嶼部に存在したとされる琉球人墓の追跡調査、沖縄県内ではあまり存在が知られていない琉球人墓の調査を行った。琉球人墓が存在した、存在するという情報がある島は黒島、硫黄島、上甑島である。

（一）黒島の琉球人墓

①黒島踏査における海域の景観

黒島調査は2003年3月9日から10日にかけて行った。真栄平房昭氏、琉球大学学生（当時）の伊地知裕仁氏、高良由加利氏、水真純子氏、筆者の五名が参加した（注9）。2003年3月9日、村営定期船みしま（下関で造船）に乗船し、9時30分頃に鹿児島港の南埠頭を出発した。往路の海上はまれに見る快晴であった。錦江湾を通過するなか、山川の手前あたりから早くも竹島と噴煙を上げる硫黄島を遠望することができた。鹿児島から最初に入港する竹島までは94㎞である。上陸することはできなかったものの、12時20分頃に島の北側にある竹島港に停泊した。そこからは錦江湾の口を正面に望むことができた。西側には開聞岳から薩摩半島南西部に連なる山並み、東には佐多岬をはっきりと確認することができた。竹島から薩摩半島南端の長崎鼻までの距離は約40㎞である。竹島港を出港すると竹島・硫黄島・黒島が一直線上に連なって見えた。左手に口永良部島を見ながら硫黄島を経由し、14時25分頃に黒島の東部に位置する大里港に到着した。竹島から黒島の大里港までは50㎞である。黒島には大里と片泊のふたつの集落が存在するが、琉球人墓が存在したという情報があるのは大里の共同墓地である。我々は大里港で下船したが、村営定期船みしまは、島の西部に位置する片泊港に向けて出発していった。

大里集落は斜面に張り付くかのような厳しい立地であったが、二本の河川（井ノ口川・宮向川）が流れ、水が非常に豊かであった。宿泊した民宿は高台にある大里集落の入り口にあたる場所であったが、3月10日の朝、民宿の前の道路からは正面に野間岳を望むことができた。黒島から薩摩半島南端部の枕崎までの距離は約65㎞である。なお、大里からは甑島で打ち上げる花火も見えるとのことである。当日の朝は高所から甑島（下甑島？）の島影も見えたそうである。黒島が絶海の孤島ではないことを実感した。また、2002年11月18日に屋久島の北部に位置する一湊を踏査したが、荒天のため黒島を望むことはできなかった。晴天であれば黒島が見えるそうである。

②大里の共同墓地調査

黒島に琉球人墓が存在したようであるとの情報は、真栄平房昭氏からご教示いただいた。『岩波写真文庫148　忘れられた島』（岩波書店、1955年）の24頁に、琉球人墓をめぐる記述と「琉球人墓」とされる一基の墓の写真が収録されているというものである。同書の黒島、「社と墓」の部分には、「至る所に琉球人墓というのがある。琉球王から島津侯への上納船がこの附近で難破し、溺死した船員の墓である」と記されている。当時、太夫

（神主）をつとめていた日高袈裟之進氏（故人）の話によるものである。「琉球人墓」として収録された墓の写真を見ると、整備された墓地ではなく、木々のなかに存在しているようである。50年前の1950年代前半には「琉球人墓」という墓が確かに存在したようである。それでは、写真の墓や「至る所」に存在した「琉球人墓」の現状はどうなっているのだろうか。

大里に到着した3月9日の午後、三島村役場大里出張所の上村広美氏に案内していただき、早速、大里の共同墓地を調査した。共同墓地は大里集落後方の山側の斜面に位置していた。奥行きのある墓地には山川石の墓石が数多く並んでいた。夕刻が迫るなか、5名でひとつひとつの墓を手分けして調べてみたものの、琉球人に関連する墓碑銘を確認することはできなかった。写真の「琉球人墓」に該当するような場所に存在する墓も見いだすことはできなかった。共同墓地の隣（手前）に居住している方にも直接質問してみたが、「琉球人墓」については知らないということであった。

ほかにも、上村広美氏によって三島村の最高齢者である日高ユキエさん（当時100才）にお話をうかがう機会を設けていただいた。日高ユキエさんは亡くなった先々代の太夫、「琉球人墓」の情報を有していた日高袈裟之進氏の妻である。「琉球人墓」についてうかがったところ、共同墓地の「大墓」と呼ばれる五輪塔の後方に並ぶ墓石がそれにあたるかもしれないとのことであった。日高袈裟之進氏の有していた情報についても詳しいことは定かでないようであった。結果的には琉球人墓は確認できず、具体的な情報を得ることもできなかったものの、日高袈裟之進氏の一番近くにいた方からお話を聞けたのは貴重な体験であった。歴史の記憶は必ずしも脈々と受け継がれていくわけではないことを思い知ることもできた。

今となっては、写真の「琉球人墓」が琉球人の墓なのか、あるいは「琉球人墓」とされた墓なのかを確かめることは困難な状況にある。しかしながら、後者を想定した場合、なぜ「琉球人墓」とされたのかが琉球・薩摩交流史を考えるうえでの問題となろう。いずれにしても、約50年前まではこのような情報もしくは伝承が存在したことは、今後共有化されるべきであろう。

（二）硫黄島の琉球人墓

①硫黄島踏査における海域の景観

硫黄島調査は黒島調査と連続し、2003年3月10日から12日にかけて行った。3月10日、片泊からまわってきた村営定期船みしまに乗船し、8時40分頃に大里港を出港、9時40分頃に硫黄島港に到着した。島の南側にある硫黄島港からは、大里とは異なり、正面に屋久島を望むことができた。大里港と硫黄島までは36㎞である。硫黄島港の西側部分には巨大な屏風のような永良部崎がそびえ立ち、東側部分には対岸と比較すると何分の一かの規模の磯松崎がある。永良部崎を左手にして硫黄島港に着岸しようとすると、港内の海水は赤褐色であった。永良部崎の外側の青い海とのコントラストが印象的であった。硫黄

島港は港湾整備が進んでいたが、永良部崎側の一部に砂浜が残っていた。

集落は港に面しており、黒島とは異なり平地に立地している。島の東部には標高 704 メートルの硫黄岳があるが、集落の北側には標高 313 メートルの矢筈岳、東側には標高 236 メートルの稲村岳があり、噴煙をあげる硫黄岳から守られているかのようであった。しかしながら、島を歩いて見ると、陽光があふれる環境にも関わらず、花壇の花が育っていないことに気づいた。墓前に供える切り花は鹿児島で購入しなければならないほど土壌的には厳しいそうである。

硫黄島では集落のなかではなく、集落の東側の磯松崎を登りきった高台にある民宿に宿泊した。海に面した庭からは、屋久島が港よりもいっそう目の前に迫って見えた。硫黄島から屋久島までは約 40 kmの距離である。また、島の南側の海岸線にある東温泉からは、夕暮れが迫るなか、正面には屋久島、右には口永良部島の島影をはっきりと見ることができた。3 月 12 日、片泊・大里からまわってきた村営定期船みしまに乗船し、10 時頃に硫黄島港を出港、竹島を経由して鹿児島に向かった。硫黄島港から竹島港までは 14 kmである。なお、2002 年 11 月 18 日に屋久島北部の一湊を踏査した際には、荒天のため黒島を望むことはできなかったものの、硫黄島を望むことはできたことにも触れておきたい。

②上場〈かんば〉の墓地調査

硫黄島に琉球人墓が存在したという情報は、『三島村誌』（三島村、1990 年）第 2 編第 4 章第 6 節 2「カライモドン」の部分から得たものである。少し長くなるが以下に引用する。

> 元禄の頃から硫黄島の人は琉球と交渉を持ちだした。上場の児玉家の後には今も琉球墓が 1 つ残っている。昔は 10 基ぐらいあって、付近は木が生い茂っていたし、琉球墓の中には 3 基ほどは鹿児島の武士の名を刻まれていたというが、道路を開通した時、墓は割って石垣にしたり埋めたりしたそうで、これらの墓については具体的なことがわからない。しかし、元禄のころ、硫黄島と交渉を持ちだした琉球の人の墓であることは確かで今残る 1 基も、この頃の五輪塔の山川石である。

『三島村誌』のこの部分は、松永守道『三島村秘史』（1972 年）を引用したものである。すなわち、文中の「今」とは現在から 30 年以上前、1970 年前後ということになる。それによると、当時、上場の児玉家の後には「琉球墓」が 1 基存在したこと、「昔」は 10 基ほど存在したこと、「琉球墓」のなかには鹿児島からの派遣役人の墓が 3 基ほど混在していたこと、道路の開通によって「琉球墓」の多くは破壊されたこと、残存した「琉球墓」は山川石の五輪塔であったことを知ることができる。約 30 年前の 1970 年前後には、1 基に減少はしたものの、「琉球墓」が確実に存在していたようである。黒島の情報よりも 20 年ほど新しく、場所まで特定されている点は貴重であるといえよう。それでは、硫黄島の上場に存在した「琉球墓」の現状はどうなっているのだろうか。

上場の墓地調査は硫黄島に到着した 3 月 10 日の午後に行った。三島村役場硫黄島出張

所の児玉悟氏に紹介していただいた元村議会議員の岩切一夫氏（当時 75 才）に墓地を案内していただいた。墓地の位置は、集落の東側を北に延び、太夫をつとめた長濱家（注１０）の屋敷地や庄屋をつとめた長濱家の屋敷地に通じる路地に面した道路の北詰め付近の路地の奥に位置し、戦時中には防空壕が掘られた丘を背にしていた。

『三島村秘史』では現存することが確認されていた山川石の五輪塔の「琉球墓」を確認することはできなかったものの、いくつかの成果があった。墓地は荒れ地となり、多くの墓石は撤去されていた。岩切一夫氏によると、墓地、畠、荒れ地という変遷をたどったそうである。現在も墓域を囲んだ石垣が残っていた。また、児玉家が拡張された（＝道路の開通？）のは昭和 30 年代末（1960 年代前半）とのことである。「琉球墓」の破壊と関係するのだろうか。そうであるとすれば、1960 年頃までは 10 基ほどの「琉球墓」は存在していた可能性がある。「昔」とは 1960 年頃までと考えることもできよう。また、残存する墓石の多くは、丘側の土手の奥の草むらのなかに横積みにされ放置されていたが、3 基のみが土手のうえに並べられていた。その中央の 1 基からは銘文を確認することができた。竹島石らしき墓石の右側面には「安永九（一七八〇）年硫黄勘場検者　山口庄左衛門　子十月四日」、左側面からは「奉□（寄カ）進　竹島庄屋日高□」の文字があった。「奉□（寄カ）進」とあることから、これが墓石でない可能性もあるが、鹿児島からの派遣役人と思われる「硫黄勘場検者　山口庄左衛門」の名を確認できたことは、派遣役人の墓が混在していたという『三島村秘史』の記述とのあいだに関連性を見いだすこともできよう。この「墓石」の両側の 2 基（山川石）はともに寛保元（1741）年のものであった。なお、岩切一夫氏ご自身は「琉球墓」の存在は知らなかったとのことである。

③硫黄島に滞在した上国使者

硫黄島は「南島海路略図」（鹿児島県立図書館蔵）などにも描かれ、那覇と鹿児島を結ぶ海上ルートに位置した。硫黄島は船奉行の管轄であり、硫黄島在番が派遣され、在番所が設置されていた。『三島村秘史』によると、「昔（＝1960 年頃まで？）」は「琉球墓」が 10 基存在したと見えることからも、上国使者や琉球の僧侶などを乗せた琉球船や大和船が寄港し、硫黄島に滞在することがあったものと思われる。なかには、硫黄島で客死した者や周辺の海域で死亡した者も存在したのであろう。『三島村秘史』では、硫黄島から琉球に渡航し、琉球で客死した人物も紹介されている。

しかしながら、琉球からの上国使者などを乗せた船舶が寄港したことを示す史料はほとんど存在しない。現在のところ、確認することができたのは、「容姓家譜」（『那覇市史資料篇』第 1 巻 8 家譜資料四）11 世義延（唐名は容澤昌）の項に見える記事のみである。

それによると、咸豊 2（1852）年 9 月 30 日に進貢二号船大筆者として渡唐し、咸豊 3（1853）年 6 月 15 日に帰国している。そして、帰国した 5 日後の 6 月 20 日には返上物宰領に任命され、7 月 9 日には那覇を出発し、上国している。鹿児島には 7 月 19 日に到着し、10 月 5 日に出発するまで 2 ヶ月半にわたって鹿児島に滞在している。10 月 17 日に

山川を出発し、翌日の10月18日には硫黄島に到着している。10月22日に硫黄島を出発し、10月28日には帰国している。

容澤昌は、まず進貢二号船によって那覇と福州のあいだを往復し、那覇にもたらされた中国商品のなかでも、薩摩藩の資本によって購入された中国商品を鹿児島まで搬送する責任者である返上物宰領として上国したのである。硫黄島に滞在したのは、鹿児島からの復路、咸豊3年10月18日から10月22日の期間であった。なお、容澤昌が乗船した進貢二号船は、福州からの復路、大島の大熊湊に漂着している。咸豊3年6月8日から6月13日まで大熊湊に滞在していたことにも触れておきたい。さらには、後述するように、道光21（1841）年には、那覇から鹿児島へ上国する往路において上甑島にも漂着している。

（三）上甑島の琉球人墓

①上甑島踏査における海域の景観

上甑島調査は2004年1月15日から17日にかけて行った。1月15日、フェリーニューこしきに乗船し、16時50分頃に串木野新港を出港、上甑島の東側の里港に向かった。上甑島は串木野の西方36㎞の海上に位置する。串木野新港は串木野の市街地を流れる五反田川の河口右岸の埋め立て地にある。河口左岸には、かつてフェリーが発着していた串木野港がある。フェリーニューこしきは1日に串木野と甑島（上甑島・下甑島）のあいだを2往復している。夕暮れが迫っていたが、串木野新港からはこれから向かう上甑島や黒島から遠望した薩摩半島南西端に位置する野間岳を確認することができた。野間岳を南側の海域と北側の海域から望んだことになる。18時頃最初の寄港地である里港に到着し、そこで下船した。上甑島には里村の一集落（里）と上甑村の六集落（中甑、江石、中野、小島、瀬上、桑之浦）が存在するが、琉球人墓が存在するという情報があるのは里の寺山墓地である。なお、上甑村は上甑島の西側と中甑島からなり、上甑村の6集落と中甑島の1集落（平良）から構成されている。フェリーニューこしきは、下甑島の東側に位置する長浜港に向かって出港した。到着予定時刻は19時10分である。

翌1月16日は雨天であったためかなわなかったが、上甑島北側の長目の浜からは、長島（鹿児島県）や天草下島（熊本県）、さらには野母崎（長崎県）を望見することができるそうである。また、訪れることはできなかったが、中甑島平良の帽子山からは、晴天であれば、薩摩半島南端の野間岳と開聞岳、さらには錦江湾の桜島をも遠望することができるとのことである。景観が東側から南側の薩摩半島だけではなく、北側の延長線上では長崎にも連続していることを感じた。

1月17日9時25分頃、下甑島の長浜港と鹿島港、上甑島西側の中甑港を経由してきたフェリーニューこしきに乗船し、里港を出港、串木野新港に向かった。前日の雨は止み、里港からは川内あたりの山並みを正面に大きく望むことができた。竹島、黒島から遠望した山並みよりもはるかに大きく見えたのが印象的であった。竹島、黒島との地理的な差異を実感した。近島などの岩礁を通過して沖合いに出ると、北は天草下島から、長島、阿久

根、川内、串木野、そして野間岳に連続する山並みを一望することができた。串木野に近づくと、天草下島、長島、阿久根、川内は天狗鼻に隠れ見ることができなくなった。10時40分頃串木野新港に到着した。

②寺山墓地の調査

里村の寺山墓地に琉球人墓が2基存在するという情報は、『里村郷土誌』上巻（鹿児島県薩摩郡里村役場総務課、1985年）第2編第1章第4節5「寺山墓地」から得た。しかも、琉球の僧侶の墓のようである。筆者は、薩摩に上国した琉球の僧侶（遍参僧）の活動について論じたことがあるが（注 11）、その時点ではうかつにも見逃していた。同書には2基の墓石の写真とともに銘文も載せられている。黒島と硫黄島では、残念ながら琉球人墓の存在そのものを確認することはできなかったが、約20年前に刊行された『里村郷土誌』の情報によると、上甑島では現存することが確実なようである。

寺山墓地の調査は、里村に到着した翌日の1月16日に実施した。上甑島には里と中甑にふたつの麓集落が存在した。里麓は上甑島と下甑島に3ヶ所設置されていた地頭仮屋のうちのひとつ（現里村立里小学校）と近接していた。里港に注ぐ河川をはさみ、地頭仮屋と隣接する里麓の入り口付近には、新田神社（現川内市）の祭神を勧請した八幡神社が鎮座していた。

寺山墓地は、麓の景観を残す集落の最奥部に所在する西願寺（浄土真宗）の後方の斜面に位置していた。『里村郷土誌』によれば、寺山墓地は旧郷士の墓地ということであるが、2基の琉球人墓は墓地のなかでも斜面の下に並んで存在した。里村教育委員会の大村慎吾氏によると、もともとは斜面の上の方に存在した琉球人墓を、近年、下の空いていた場所へ移転したとのことである。

正面左側のものは、高さ43㎝、直径21㎝の石塔が上部は蓮華状になっている角石（高さ13㎝位、横37㎝、奥行き40㎝）に乗っていた。墓石のすぐ後ろに壁があることに加え、当日は雨天で暗かったため、石塔の後ろの部分の文字を十分に読みとることはできなかったが、銘文は以下の通りである。なお、「天保十一丑」とあるが、天保11（1840）年は子年、丑年は天保12（1841）年である。

一圓禅會知蔵塔
琉陽東禅寺清仁徒
夫□（茲カ）亡□（徳カ）為大事究明順水張□（帆カ）
□欲臻鹿児府錦江之津海路
俄相逢風難未至其要津既
当嶋之小倉蓑掛浦江及破船即
示去溺死噫悲哉時之不祥
歟堪為断腸而幸慈師□（茲カ）在
同行之輩直求挙其死体

以安葬此地非偽果可真哉
故銘之可刻附歟厥由縁而
永値□（関カ）地備只
不破壊冀也　字数百十四
天保十一丑五月廿七日

正面右側のものは、高さ 43 ㎝、直径 20 ㎝の石塔が左側のものと同様に上部は蓮華状になっている角石（高さ 15 ㎝位、横 42 ㎝、奥行き 39 ㎝）に乗っていた。やはり「天保十一丑」と見える。

高岳祖源知蔵塔
琉陽□□（喜・善カ）寺大淳徒
于時弘化四未二月彼岸建之
施主
祖柱
玄能
天保十一丑五月廿七日

銘文の内容については、摩滅した箇所や正確に読みとれなかったところがあるため、詳細に論じることは避けるが、2 人の琉球僧は、同じ船舶に乗船して鹿児島に向かう途中、上甑島の「小倉蓑掛浦」で破船し、「天保十一丑（一八四〇・一八四一）」5 月 27 日に溺死したもののようである。「小倉蓑掛浦」とは、上甑島の南側、上甑村との境界に近い小ヶ倉鼻と蓑掛浦を指しているようである。『里村郷土誌』の編著者である塩田甚志氏のご教示によると、小ヶ倉鼻は断崖絶壁、蓑掛浦は入り江で玉石が転がっているとのことである。筆者は上甑島の南側の山中をめぐる道路から小ヶ倉鼻と蓑掛浦を確認することができたが、やはり非常に厳しい地形であった。左側の墓石には記されていないものの、右側の墓石に見えるように、現存する墓石が製作されたのは弘化 4（1847）年のようである。

四、甑島に漂着した上国使者と渡唐役人

これまで、先行研究のなかでは、近世期において日向海域に漂着した琉球船の事例については把握がなされている（注 12）。しかしながら、琉球船、あるいは琉球の上国使者が乗船した大和船の甑島への漂着について扱ったものはほとんど存在しない（注 13）。那覇・福州・鹿児島を結ぶ海域における海上交通において、周縁部にあたる日向海域や甑島に漂着した琉球船と上国使者が乗船した大和船の事例を把握することは、ややもすると、那覇－鹿児島、那覇－福州と硬直化した直線的な海域のイメージを抱きがちになるなかで、一定の意義があると考える。そこでここでは、「家譜資料」（『那覇市史資料篇』第 1 巻 6～8）に見える上国使者や渡唐役人の甑島への漂着についてまとめてみた（注 14）。

○「家譜資料」に見える甑島に漂着した上国使者と渡唐役人

・凡例

〔唐名〕唐名とともに「家譜資料」での出典を示した。『那覇市史資料篇』第1巻6家譜資料2は『久米村系』、『那覇市史資料篇』第1巻7家譜資料3は『首里系』、『那覇市史資料篇』第1巻8家譜資料4については、那覇系士族の場合は『那覇系』、泊系士族の場合は『泊系』とした。

〔乗船〕のりぶね、乗船した船舶を示した。

〔職名〕

〔往路・復路〕那覇から鹿児島、那覇から福州への往路での漂着か、鹿児島から那覇、福州から那覇への復路での漂着かを示した。

〔那覇・五虎門出発〕鹿児島への往路での漂着の場合は那覇を出発した日付、福州から那覇への復路での漂着の場合は閩江河口部の五虎門を出発した日付を示した。

〔第一次漂着地（漂着日）〕甑島に漂着する以前に漂着地がある場合は日付とともに示した。

〔甑島漂着・出発〕

〔経由地（経由日）〕山川を経由する以前に経由地がある場合は日付とともに示した。

〔山川到着・出発〕〔鹿児島到着・出発〕〔那覇到着〕

〔備考〕福州から那覇への復路での漂着の場合は、那覇を出発した日付をここで示した。

①〔唐名〕岑起祚、「岑姓家譜」一世宗陳（『那覇系』）〔乗船〕謝恩船〔職名〕大筆者
〔往路・復路〕福州からの復路〔五虎門出発〕万暦40（1612）年
〔第一次漂着地（漂着日）〕五島（万暦40年）
〔甑島漂着・出発時期〕万暦40年
〔経由地（経由日）〕坊津（万暦40）〔山川到着・出発〕不明
〔鹿児島到着・出発〕不明〔那覇到着〕万暦41年正月3日
〔備考〕那覇出発は万暦39（1611）年

②〔唐名〕麻世徳、「麻姓家譜」一一世真仲（『首里系』）〔乗船〕大唐船〔職名〕脇筆者
〔往路・復路〕福州からの復路〔五虎門出発〕康熙52（1713）年7月11日
〔第一次漂着地（漂着日）〕八重山島川平津（康熙52年7月18日着、7月26日発）
〔甑島漂着・出発時期〕8月5日着、8月12日発
〔経由地（経由日）〕坊津（8月25日発）〔山川到着・出発〕8月25日着
〔鹿児島到着・出発〕9月5日着、9月15日発〔那覇到着〕9月22日着
〔備考〕往路、那覇出発は康熙52年2月12日、復路、大唐船は坊津で破船したため鹿児島で小唐船に乗り換え

③〔唐名〕雍国臣、「雍姓家譜」五世興成（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕琉仮屋倉？使（琉蔵役）

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕雍正3（1725）年7月4日

〔第一次漂着地（漂着日）〕なし

〔甑島漂着・出発時期〕7月11日着、7月20日発

〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕不明

〔鹿児島到着・出発〕8月2日着、雍正4（1726）年10月5日発〔那覇到着〕雍正4年10月14日着〔備考〕なし

④〔唐名〕向啓猷、「向姓家譜」六世朝良（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕「大和江御使者記」（沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫蔵）では、「当秋進貢御免許付御訴訟御使者但謝恩使被差越度御願之趣」とある。

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕雍正8（1730）年7月6日

〔第一次漂着地（漂着日）〕なし

〔甑島漂着・出発時期〕7月24日発

〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕7月25日着

〔鹿児島到着・出発〕7月26日着、10月6日発〔那覇到着〕10月21日着

〔備考〕なし

⑤〔唐名〕翁士達、「翁姓家譜」六世盛敞（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕謝罪使者

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆36（1771）年7月22日

〔第一次漂着地（漂着日）〕なし

〔甑島漂着・出発時期〕7月28日着、8月13日発

〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕8月15日着、8月18日着

〔鹿児島到着・出発〕8月19日着、12月17日発〔那覇到着〕12月29日着

〔備考〕中甑島に漂着

⑥〔唐名〕翁秉義、「翁姓家譜」六世盛峯（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕伊舎堂親方与力

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆36（1771）年7月22日

〔第一次漂着地（漂着日）〕なし

〔甑島漂着・出発時期〕8月13日発

〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕8月15日着

〔鹿児島到着・出発〕8月18日着、12月17日発〔那覇到着〕12月29日着

〔備考〕中甑島に漂着

⑦〔唐名〕麻士雄、「麻姓家譜」一三世麻士雄（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕尚哲与力

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆38（1773）年6月5日

〔第一次漂着地（漂着日）〕なし

〔甑島漂着・出発時期〕6月9日着、6月11日発
〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕6月15日着
〔鹿児島到着・出発〕6月19日着、乾隆39（1774）年3月19日発〔那覇到着〕乾隆39年4月9日着
〔備考〕鹿児島からの復路、屋久島、運天を経由

⑧〔唐名〕毛宣猷、「毛氏家譜」六世宣猷（『久米村系』）〔乗船〕不明〔職名〕儀衛正
〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆55（1790）年7月12日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕7月17日着
〔経由地（経由日）〕串木野（7月22日着）〔山川到着・出発〕陸路のため経由せず
〔鹿児島到着・出発〕7月23日着、乾隆56（1791）年4月10日発、10月16日発
〔那覇到着〕乾隆56年11月21日？
〔備考〕甑島から串木野までは小船で移動、鹿児島からの復路では「内浦」、口永良部島に漂着、山川に廻航するも破船、山川から鹿児島まで陸路で移動、鹿児島からは馬艦船に乗船、本部間切瀬底港を経由するも読谷山間切長浜湾で座礁、陸路で首里に向かう

⑨〔唐名〕翁秉義、「翁姓家譜」六世盛峯（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕年頭慶賀使
〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆58（1793）年7月28日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕8月6日着、8月13日発
〔経由地（経由日）〕坊津（8月14日着、8月16日発）〔山川到着・出発〕陸路のため経由せず？坊津から「早路起身」とあり
〔鹿児島到着・出発〕8月17日着〔那覇到着〕鹿児島で客死
〔備考〕12月23日に鹿児島琉球館で病死、光明寺に埋葬される

⑩〔唐名〕尚周、「尚姓家譜」一世尚周（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕若君誕生を賀するための使者
〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆58（1793）年7月27日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕8月4日着、8月15日発
〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕不明
〔鹿児島到着・出発〕8月19日着、乾隆59（1794）年正月15日発〔那覇到着〕乾隆59年正月23日
〔備考〕甑島で若君死亡の報に接する

⑪〔唐名〕毛邦俊、「毛姓家譜」一三世盛邑（『首里系』）〔乗船〕不明〔職名〕年頭慶賀使

〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕乾隆59（1794）年6月9日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕6月14日着、6月20日発
〔経由地（経由日）〕坊津（6月30日発）〔山川到着・出発〕陸路のため経由せず
〔鹿児島到着・出発〕7月4日着、乾隆60（1795）年9月10日？発〔那覇到着〕乾隆60年10月15日
〔備考〕中甑島の沖に停泊

⑫〔唐名〕陳允恭、「陳氏家譜」一三世允恭（『久米村系』）〔乗船〕往路は接貢船（在船都通事林家塊の従人として）、復路は泉崎村大城仁屋飄風馬艦船〔職名〕勤学人、泉崎村大城仁屋飄風馬艦船通事
〔往路・復路〕福州からの復路〔五虎門出発〕嘉慶9（1804）年6月1日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕嘉慶9年6月10日着
〔経由地（経由日）〕不明〔山川到着・出発〕不明
〔鹿児島到着・出発〕8月7日着〔那覇到着〕9月22日
〔備考〕往路、那覇出発は嘉慶6（1801）年10月7日

⑬〔唐名〕容澤昌、「容姓家譜」一一世義延（『泊系』）〔乗船〕不明〔職名〕琉球館重筆者
〔往路・復路〕鹿児島への往路〔那覇出発〕道光21（1841）年5月21日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕5月27日着、6月3日発
〔経由地（経由日）〕市来（6月3日着）〔山川到着・出発〕陸路のため経由せず
〔鹿児島到着・出発〕6月5日着、道光23（1843）年8月4日発〔那覇到着〕道光23年8月14日
〔備考〕上甑島で破船

⑭〔唐名〕詹光国、「詹姓家譜」六世兼賢（『首里系家譜』）〔乗船〕護送船〔職名〕官舎
〔往路・復路〕福州からの復路〔五虎門出発〕同治元（1862）年閏6月21日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕同治元年7月2日着、7月5日発か
〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕7月6日着
〔鹿児島到着・出発〕7月17日着、9月4日発〔那覇到着〕9月8日
〔備考〕往路は同治元（1862）年4月11日に那覇出発、復路では7月5日に上甑島から中甑島へ移動、7月18日に鹿児島琉球館に安挿、閏8月27日に「登船」

⑮〔唐名〕林世錫、「林氏家譜」八世世錫（『久米村系』）〔乗船〕往路は進貢頭号船（北京大通事新垣通事親雲上奕隆の従人として）、復路は接貢船か〔職名〕勤学人

〔往路・復路〕福州からの復路〔五虎門出発〕同治元（1862）年6月21日
〔第一次漂着地（漂着日）〕なし
〔甑島漂着・出発時期〕同治元年7月3日着、7月5日発、
〔経由地（経由日）〕なし〔山川到着・出発〕7月5日（酉刻）着、7月8日発
〔鹿児島到着・出発〕7月9日着、9月2日以前発〔那覇到着〕9月8日
〔備考〕往路は、咸豊8（1858）年10月8日に那覇出発、咸豊9（1859）年北京に上京、復路での甑島漂着は上甑島、7月10日に鹿児島琉球館に安挿、9月2日山川到着、9月5日山川出発

現在のところ、上国使者や渡唐役人が甑島に漂着した事例については、15件を確認することができる。このほかにも、寺山墓地に埋葬された2名の僧侶が乗船した船舶が1840年頃に上甑島で破船している。時期は17世紀前半の万暦年間から19世紀後半の同治年間におよぶ。

15件のなかで、那覇から鹿児島への往路において漂着した例が10件（③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬）、福州から那覇への復路に漂着した例が5件（①②⑫⑭⑮）である。前者については、「家譜資料」では琉球船なのか大和船なのかを明らかにすることはできないが（注15）、同じ年の同じ時期に那覇を出発している例が4件存在する。⑤と⑥は乾隆36（1771）年、⑨と⑩は乾隆58（1793）年である。⑤と⑥は同じ日那覇を出発していることから、同じ船に乗っていた可能性もある。これに対して、⑨と⑩は那覇を出発した日が1日異なることから、別々の船であった可能性が高い。なお、⑥と⑨は同一人物であり、乾隆36年と乾隆58年の2回にわたって鹿児島への往路で甑島に漂着している。しかしながら、乾隆58年12月23日に鹿児島琉球館で病死し、光明寺に埋葬されている。

後者の帰唐船については、①が謝恩船（注16）、②が進貢頭号船（大唐船）、⑫が漂着馬艦船、⑭が護送船、⑮が接貢船である。①は五島に漂着したのち、②は石垣島の川平津に漂着したのちに甑島に漂着している。また、①を除く4件は、漂着したのち那覇ではなく鹿児島に向かっている。②⑭⑮については、薩摩藩の資本で購入した中国商品の搬送と関係しよう。⑫については、琉球に帰国したい旨を再三にわたって甑島で申請したものの、薩摩藩の許可するところとはならなかった。嘉慶9（1804）年6月10日に漂着したにも関わらず、鹿児島到着が約2ヶ月後の8月7日であることはこれと関係しよう。

甑島での漂着地については、それぞれの島の具体的な地名は記されていない。甑島とだけある場合もあるが、⑤⑥⑪は中甑島（⑪は中甑島の沖に停泊）、⑬⑮は上甑島と見える（⑬は破船）。また、⑭では上甑島に漂着したのちに中甑島に移動し、山川へ向かっている。上甑島の里湊と中甑湊には津口番所が置かれていた。また、中甑島の東海岸には、19世紀の初頭に湖沼を開削した平良湊が造営されている。甑島での滞在期間については、15件のうち10件を明らかにすることができる（②③⑤⑦⑨⑩⑪⑬⑭⑮）。⑫のような特殊な例もあるが、滞在期間はいずれも10日前後である。短いものでは⑦⑮の3日、長いも

のでは⑤の 16 日や⑩の 12 日がある。

甑島に漂着したのち、多くは琉球船や上国使者が乗船した大和船の船改めが行われる山川を経由し、錦江湾を通過して鹿児島に向かっている。しかしながら、原船で山川を経由することなく、薩摩半島に渡り、そこから陸路で鹿児島に向かった事例を 4 件（⑧⑨⑪⑬）見いだすことができる。このなかに帰唐船は含まれない。⑧は甑島から串木野まで小船で移動し、そこから陸路で鹿児島に向かっている。⑨では坊津に移動し、「早路」で鹿児島に向かっている。陸路とは明記されていないものの、山川を経由する場合は鹿児島に到着するまでに数日を要するところ、ここでは翌日に到着していることから陸路であった可能性が高いと考える。⑪でも坊津に渡り、そこから陸路で鹿児島に向かっている。⑬では原船は上甑島で破船している。市来に渡り、陸路で鹿児島に向かっている。このうち、⑧は慶賀使の儀衛正、⑨⑪は年頭慶賀使をつとめていることに触れておきたい。

なお、⑭の護送船と⑮の接貢船は、ほぼ同時に上甑島に漂着し、山川を経由して鹿児島に向かっているが、鹿児島に到着した日は接貢船の方が早く、8 日あまりの差がある。山川に滞在していた期間が護送船の方が長かったことに起因するようであるが、なにゆえ護送船が長く、接貢船が短かったのか疑問が残るところである。

【注】

(1) 拙稿「帰唐船の薩摩領内漂着－清朝との通交期を中心に－」（『第 4 回「沖縄研究国際シンポジウム」世界に拓く沖縄研究』2002 年）。

(2) 徳永和喜「島津氏の南島通交貿易史－南島の国際性と薩摩藩の琉球口貿易の展開－」（『海と列島文化第 5 巻　隼人世界の島々』小学館、1990 年）。

(3) 一九世紀後半における口永良部島での密貿易については、川越政則「口之永良部島物語」（『南日本文化史』北山書房、1950 年）などでも触れられている。

(4) 薬用植物であるガジュツの乾燥工場であったようである。現在でも、恵命堂の工場は屋久島（上屋久町楠川）にあり、ガジュツを配合した胃腸薬を製造しているとのことである。

(5) 尚家文書には光明寺や南林寺に存在した琉球人墓に関連する史料が存在する。那覇市市民文化部歴史資料室編『尚家関係資料総合調査報告書 I　古文書編』（那覇市、2003 年）の史料番号 366 から 379 にわたる史料は、光明寺や南林寺に存在した琉球人墓などと関連するものである。史料番号 366 の外題は「同治十三年甲戌／明治七年戌八月十二日　毎年七月十四日南林寺光明寺琉人衆御墓所御焼香日記　重書役方」である。

(6) 大慈寺に現存する琉球人の僧侶の墓については、小野まさ子「資料紹介」（『地域と文化』第 57 号、1990 年）、沖縄県立博物館編『企画展　刻まれた歴史－沖縄の石碑と拓本』（沖縄県立博物館友の会、1993 年）がある。

(7) 道隆寺跡に現存する琉球人の僧侶の墓については、小野まさ子「道隆寺にある琉球

僧の墓－薩琉交流史の一側面」（『浦添市立図書館紀要』第3号、1991年）がある。

(8) 新垣筑兵衛の墓については、仲地哲夫「新垣筑兵衛の墓」（『地域と文化』第74号、1992年）がある。

(9) このときの黒島・硫黄島調査については、真栄平房昭「シリーズ沖縄歴史の散歩道 忘れられた島　薩南三島の旅から」（『月刊榕樹』第257号、2003年4月）がある。

(10) 硫黄島にある三島開発総合センターの郷土資料展示室に展示されていた「長濱氏嫡流系譜」によると、歴代の太夫は「神道稽古」などで鹿児島に上国している。

(11) 拙稿「遍参僧に関する覚書」（『史料編集室紀要』第23号、1998年）。

(12) 黒木國泰「近世日向沿岸漂着唐船・琉球船と抜荷関係年表（稿）」（平成10・11・12年度科学研究費補助金研究成果報告書『近世日向沿岸漂着唐船・琉球船と密貿易に関する基礎的研究』2001年）。

(13) 甑島に漂着した琉球船のなかでも、帰唐船については前掲注（1）の拙稿がある。朝鮮船の漂着については徳永和喜「薩摩藩の朝鮮通事について」（『黎明館調査研究報告』第八集、1994年）、中国船などの漂着については橋口三郎『薩摩国甑島風土記覚書』（橋口三郎、1976年）がある。

(14) 甑島のほかにも、「家譜資料」（『那覇市史資料篇』第1巻6～8）や『中山世譜附巻』では、上国使者が乗船した船舶が五島あるいは天草に漂着した例を見いだすことができる。

(15) 深瀬公一郎氏から、上国使者は天明8（1788）年以降に琉球船に乗船するようになるとのご教示を得た。⑧⑨⑩⑪⑬の5件が該当することになる。

(16) 『歴代宝案』校訂本第二冊1－26－17号文書によると「鳥船一隻」と見える。

［付記］2003年3月の黒島・硫黄島調査では、黒島の日高ユキエ氏、三島村役場大里出張所の上村広美氏、硫黄島の岩切一夫氏、三島村役場硫黄島出張所の児玉悟氏、三島開発総合センターの徳田和良氏に大変お世話になった。2004年1月の上甑島・中甑島調査では、里村の塩田甚志氏、里村教育委員会の大村慎吾氏、上甑村教育委員会の東富可志氏に大変お世話になった。記して謝意を述べたい。

（ふかざわ　あきと　沖縄国際大学非常勤講師）